

部 歌

古 林 先 生 作 詞

一、まや六甲に抱かれて

ここ六甲台の水清し

ちぬの浦和をみおろして

シブキをあげる健男児

二、フリー プレスト バタフライ

バック リレー ポロまでも

凌泳健児の意気高し

いざや競わん腕を撫じ

三、ああなつかしの水泳部

六甲台のプール辺に

月見の宴で泳ぎやめ

くる夏まっていきりたつ

水 泳 部 歌

作詞 古 林 喜 楽

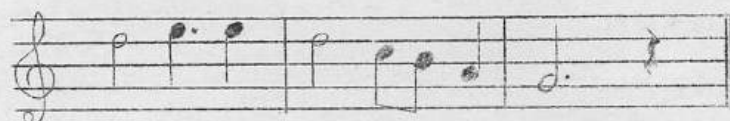
作曲 山 田 貴 彦



1. ま や 六 - 甲 - に い だ か れ て こ こ む こ が お か の
 2. フ リ - ブ レ ス ト バ タ フ ラ イ バ ッ ク - リ レ -
 3. あ あ な つ か し の す い え い ぶ ろ っ こ り だ い の -



み ず き よ し ち ぬ の う ら わ を み お ろ し て - し ぶ き を あ -
 ポ ロ ま で も り よ う え い け ん じ の い き た か し い さ や き そ
 ブ - ル ベ た つ き み の え ん で - お よ ぎ や め く る な つ ま -



げ る け ん だ - ん じ
 わ ん り で を - ぶ し
 っ て い き い り た つ



浄水装置基金募金状況報告

石 井 義 章

この募金を決定した、浸泳会臨時総会は、昨年七月九日であった。大阪市大との定期戦終了後、同校学生会館の一室に古林先生を始め、会員多数の御出席を得て熱心に討議の上募金にふみ切る事を決定し、七時頃雨の中を帰途についた。梅田で先生は阪急へ、私は国鉄に乗る為、お別れした。所が大阪駅に来てみると大雨の為、甲子園より西は不通との事、阪急へ回っても、阪神へ出ても何れも西宮止りと云う、駅員の話では神戸方面は記録的な豪雨で大水害との事、次第に心細くなり、とにかく少しでも西へ行ける所まで行こうと阪急で西宮北口まで。駅前には既に一面の水、電車もバスもタクシーも交通機関はすべてストップ。停電で真暗な街に横なぐりの雨と、時折夜空を引さく様な雷光がすさまじい。家族の安否が気づかわれるまま、何としても帰らねばと、膝までつかかる濁流の中をズブぬれになって十一時過ぎやっとの思いで家にとどりついた。早速先生のお宅へ電話した所、まだお帰りでないとの事、お別れするまでの状況を報告し、こんな事なら梅田で別れず、御一緒にお供しておればよかったと後悔した。話が脇道に

それだが、何となく募集の前途多難を暗示する様な一夜であった。

所が、八月に入って募金を開始してみると意外に順調な滑り出して、殊に若い新制のOBが頑張って募集してくれた。又一方現役員も先輩にばかり依存して居ては申し訳ないとシーズン中、部として請負った某銀行のプールの管理のアルバイト料、或は、十一月にはダンスパーティーを開催し、その純益金を基金に組入れる等努力した。この調子ではべ切りの本年八月末には目標の百三十万達成も不可能ではないと思われる。

考えてみれば、六甲台プールと云っても、上筒井時代の古い先輩は泳がれた訳でもなし又、戦後二十七年迄の卒業生は、このプールが米軍に接収されていた関係上、直接プールにつながる思い出は何もない。その他のOBにしても、金を出して浄水装置をつけても、自分達が泳ぐ機会はほとんどなからう、全く今後の部員の為と云う以外何もないのである。

昨今の政治献金を始め、裏口入学の寄附からエベッサンの養錢に到るまで、何らかの反対給付を期待した寄附、献金の多いせちがらこの世の中で、全く反対給付の考えられないこの募金が順調に進んでいる事は、会員各位の愛部心の現れと深く感激している

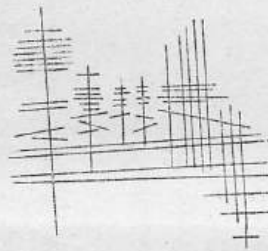
次第です。この事は現役部員にOBと現役の結びつきが、どうゆうものかを語らずして知らしめる事となり、将来OBとなった時後輩に対して如何にあるべきかを考えさせ、かくて神戸大学水泳部の美しき伝統が永遠に引継がれて行くものと信じます。

尚、募金べ切は本年八月末で現在まだ募集中ですから、若しお忘れの方、或は追加お申し込み頂ける方御座いましたら「神戸市灘区六甲台町 神戸大学水泳部」宛お申し込み下さい。

募金お申し込み者左記の通り（43年3月1日現在）

現役調達金 八〇、〇〇〇円

以上合計 八六名 九六六、五〇〇円



浄水装置基金募金御申込者氏名

	氏名	回数	御申込額		氏名	回数	御申込額
1	古林喜楽	高19	50,000	27	三宅林学	16	12,000
2	山田幸男	部長	10,000	28	石井喬	◇16	3,000
3	白山源三郎	高15	10,000	29	武内信一郎	◇17	6,000
4	繁益繁次郎	◇19	15,000	30	岡庄一郎	◇17	12,000
5	坂本豊一	◇22	10,000	31	小西信次	◇18	12,000
6	作田耕三	◇22	30,000	32	中川正敏	◇20	12,000
7	北条貞夫	◇25	12,000	33	石井義章	◇22	12,000
8	太田清	◇26	15,000	34	山本幸男	◇22	12,000
9	小山賢之助	学1	60,000	35	中井三郎	◇22	12,000
10	草野嘉一	◇1	10,000	36	浜川広海	◇22	9,000
11	山田常雄	◇1	10,000	37	今井政一	専1	9,000
12	熊野利夫	◇2	15,000	38	衣川昭	◇1	12,000
13	池谷俊一	◇4	6,000	39	榊原修造	新3	12,000
14	小池三郎	◇5	12,000	40	佐藤一夫	◇3	15,000
15	山村宮男	◇6	12,000	41	増井幸蔵	◇3	6,000
16	村上秀造	◇7	12,000	42	松田司郎	◇5	6,000
17	伊藤英二	◇7	6,000	43	山口仁郎	◇5	12,000
18	中村市治	◇9	20,000	44	前田弘義	◇5	3,000
19	鈴木啓介	◇10	30,000	45	岡田昌三	◇5	10,000
20	山口宗樹	◇10	12,000	46	石本茂樹	◇6	9,000
21	前田寿	◇11	8,500	47	岡見晴児	◇6	3,000
22	平井洋	◇11	6,000	48	岡村司	◇7	6,000
23	柏木慶三	◇11	6,000	49	北村敏	◇7	9,000
24	熊野泰三	◇12	6,000	50	柴川泰介	◇7	9,000
25	萩野茂希	◇13	12,000	51	太田譲	◇8	9,000
26	湯山正三	◇14	6,000	52	黒田英雄	◇8	6,000

	氏名	回数	御申込額		氏名	回数	御申込額
53	原 謙三	新 8	9,000	70	武 政 英 幸	新 12	10,000
54	宇 賀 史 郎	◇ 8	9,000	71	鈴 木 正 彌	◇ 12	9,000
55	上 村 久 治	◇ 8	3,000	72	清 水 曉 夫	◇ 12	6,000
56	酒 井 孝 榮	◇ 9	10,000	73	山 本 忠 比 古	◇ 12	6,000
57	野 田 浩 志	◇ 9	9,000	74	堤 荏 祐	◇ 12	6,000
58	井 上 隆 史	◇ 10	6,000	75	安 茂 弘	◇ 12	6,000
59	萩 原 武	◇ 10	7,500	76	滝 沢 章 三	◇ 12	6,000
60	竹 元 忠 彬	◇ 10	3,000	77	前 田 和 秀	◇ 13	10,000
61	岡 田 重 義	◇ 10	6,000	78	横 田 興 二	◇ 13	6,000
62	高 岡 保 宏	◇ 10	6,000	79	手 嶋 忠 之	◇ 14	6,000
63	米 田 啓 祐	◇ 10	6,000	80	樋 口 周 平	◇ 14	10,000
64	丸 山 卓 也	◇ 11	6,000	81	木 下 雅 浩	◇ 14	10,000
65	荒 井 康 之	◇ 11	9,000	82	中 畑 勝 明	◇ 14	10,000
66	鈴 木 剛 弘	◇ 11	6,000	83	日 野 康	◇ 14	9,000
67	窪 田 信 雄	◇ 11	2,500	84	宮 部 高 博	◇ 15	10,000
68	夏 見 昭 次	◇ 11	6,000	85	久 保 佑 四 郎	◇ 15	10,000
69	藤 岡 治 男	◇ 11	3,000	86	阿 部 洋 三	15	10,000

以上 御申込者 86名 御申込総額 886,500円

現役調達金 80,000円

以上合計 966,500円

先輩からの便り

私の夢はいつ実現するか

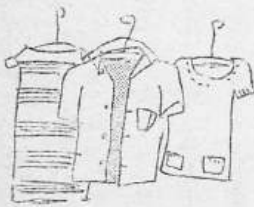
古 林 喜 楽

昨年の夏はきびしい暑さであったので、近年には珍らしく、毎日泳いだ。淡路へも二回泳ぎに行ったり、熱海や揖保川でも泳いだ。神戸市内のプールに至っては、方々を荒らしまわったが、何ととっても一番多く水にしたしんだのが、オリエンタル・ホテルのプールであった。七米の小さいプールで、ターンの練習をしているようなものであるが、それでも何十回となく往復していると、結構相当の運動になった。プールは午後五時が終で、それからプールが噴水場になり、かたわらの庭（三階の）がビア・ガーデンとなる。私にとっては全くの天国であった。午後二時頃にかけて、二、三百米泳いで甲羅をほし、ほしでは又泳ぐ。五時前になると、ホテルのシャワーで身体を洗い、前庭へとおもむるに足を運ぶ。毎日の日課のようになっていたから、黙っていてもジョッキとソーセージが運ばれてくる。やがて舞台でハワイアンが耳に入りはじめる。ジョッキを二、三杯重ねているうちに、

ほろりとしてきて、私も何とはなしに歌いたくなってくる。ときどき舞台へあがり、ギターにあわせて音痴ぶりを発揮するという楽しみもあった。

それはそれとして、あれほど私が唱えている一年三百六十五日泳げるプールが、なぜいまだに神戸に実現されないのであろうか。一、二協賛会員もできているのであるが、いまだに日暮れて道遠しの思いである。この頃はもうポチポチしびれが切れ出してきた。せめてこれが実現するまでの間、デパートあたりで、折りたたみのポータブル・プールを売り出さないものであるかと思う。空地に組みたてて水を張り、すんだら水をぬいて折りたたみかたづけるのである。それとも新幹線の一車輛だけをプールにして、プール列車というようなものを、国鉄さんがつくってくれないものであろうか。

呵 々



流れ星

学 10 鈴 木 啓 介

四時二十分目がさめた。水を一杯のんで、オロナミンCを一本のみゆっくりと煙草をすった。四時四十分風呂に入り、十分後にまた水を一杯とりポピタンDを一本のんでトレーニングパンツを手早く着て車で市民競技場にゆき五時十五分ゆっくりと起始めた。昨日雨が降ったので今朝は空気がきれいで気温も高くトラックの調子も大変よい。そして頭の上にはきれいな星が数へきれなくきらめいていた。走りながら昨日は何をしたのかとか、今日は何をしようかなどと考えていたが、やがて体が汗でぬれて来ていい気持ちになった。そしていつものペースにスピードを上げて、やがて五回半すなわち二千二百m程走った。このトラックは一周四百mでスタートは西側にあり、南に向いて東へ、それから北に向いて走る様になっている。従って北の空を向いて走っているとき、きれいな流れ星が、一瞬走り去った。こんなきれいな流れ星を見て何とも云いあらわせない感激にひたった。そして私は少年時代の田舎の生活や様々な想出ししばらく我を忘れることが出来た。六回目、七回目、そして九回目が終りに近づいたので右手の手袋をはずし、時計のスイッチにふれた瞬間南の空に本当にすばらし

い流れ星が消えていった。私は感激した、そして力走に入って十回目を走り終り時間の針を止めた。私は最終の一回目はいつもタイムを取ることにしているのです。まだ暗いので何秒であったか分らなかつた。汗をふきながら家に帰ったとき六時であった。NHKのテレビにスイッチを入れてニュースを見た。六時二分と出ていた。それからまたゆっくりと風呂に入り、頭から足まで石鹸で洗って六時三十分からの「あかるい農村」を見た。今朝はミンクの毛皮について、その価値や日本並びに世界の生産高および飼育方法などを教えていただいた、六時五十五分の天気予報を聞いて続く時報で七時に時計の誤差はないかを確かめた。その時先程のタイムを見たらいつもと同じ様であった。そしてこの手紙を書き始めて七時四十分書き終った。

K 君への手紙

新 11 丸 山 卓 也

K君お元気ですか。長く苦しいシーズンも終り来シーズンへの準備に忙しいことでしょう。

君が今春神戸大学の水泳部へ入部したことを君からの手紙で知り大変うれしく思っています。私が卒業してからすでに数年になろうとしています。年々発展してゆく水泳部を頼もしく見守

っています。数多くある運動部の中でも特に厳しい部類に入る水泳部を君が選んだことは君の先見の明の一端を示すものと思えます。君もいっていたように「鉄は熱い中に打たねばならない」のです。それには君のように高校時代から連続して猛練習に打ち込みきたえることは必ず後で報われましょう。K君、君が水泳を続け水球もやるからには試合には必ず勝たねばならないと思えます。試合に参加するだけなら誰れにでもできることでありさしたる意義はないのです。しかし私も学生時代何度かなぜ苦しい練習をするのか、なぜレースに勝たねばならないのか、と考えたこともあります。そのたびにレースや水球の試合に勝つことによって得られる満足感とか大学の名誉のためだとかいう自己満足に支えられてそのような邪念を打ち消したと思います。ただ一ついえることは勝利の喜びを一度でもかみしめた人にはこのような理念に燃え練習を意欲的にすることは容易なことであっても、いつも敗戦にまみれ勝利から遠ざかっているチームには仲々むづかしいかもしれません。K君、競泳に水球に常勝神大チームの宿命を背負った君達は君等自身を鍛錬し、磨くことにこれほどよい機会はありません。今の実業界ではアメリカ式の経営戦略が流行し、曰く「自己管理」「自己啓発」「OR」etc………。これらのことをよく考えてみると水泳部員である限り部生活の中で実行してきたことばかりです。自分の得意とする種目、フォームを研究し自分の実力を毎日伸ばそうとする努力心、向上心は部員として当然持つ

ものなのです。また勝利を得るために工夫した練習計画はORそのものです。部生活の経験のない人にとってこれらのことは理論としてわかっているとしても実際にそれを実行してきたことはありません。

K君、あなたがたが卒業して実業界に入ったときに水泳部を通じて習慣的に身につけたものに必ず感謝するときがくるでしょう。そのときはまた勝利の喜びをかみしめるときでもあります。勿論君がいつかいていたように同好会化した部にそれを求めることは無理に違いありません。来シーズンの君のチームの活躍を楽しみにしています。では又。

敬 具



河童の歩み



昨シーズンを顧みて

前主将 鈴木俊彦

昨シーズンを振り返って見ると、自分の無力さをつくづくと感じ、まったく恥ずかしい限りである。自分はクラブの為に何をしたのか、クラブは少しでも進歩したのか、こう考えると、出て来る答は、いつも否定的なものばかりである。ここに深く反省すると共に、今シーズンの参考になればと思つて、ペンをとつた。

昨年、シーズン始めに、僕は三つの公約をした。それは、関西インカレの一部昇格であり、全国国公立戦団体出場であり、旧三商大戦完全優勝であつた。この公約は、ことごとく、しかも完全に失敗に終つた。この原因はどこにあるのか。答は簡単である。我々よりも相手の方が強かつたから、言い交えろと、我々の進歩の度合よりも、相手のそれの方が、ずっと大きかつたからである。ここで言う進歩とは、何も記録だけのことではない。そんなものは、ただ単に目安になるだけのものである。それよりもっと大

きな、内に秘めた熱いものが、我々には少なかつたのではなかつたか。ある人はそれをスポーツマンシップと言ひ、又ある人はそれを根性という。そういう内に秘めた激しいものを育てる事を、キャプテンの立場にあつた僕は、忘れていたように思う。ただ記録を短縮することだけが、敵に勝つ唯一の方法だと思ひ、あまりにも記録にこだわりすぎていた。だから練習では、いい記録を出していても、試合では、持てる力を十分に発揮しないままに終つてしまふ、そんなタイプの選手が多かつたのではなからうか。今頃になつて気がついているようでは、キャプテンとしては、まったく失格である。新キャプテンが、僕の失敗をくり返さない為にも、この事だけは、特に言っておきたい。速いクラブを作るよりも、激しいクラブを、作つてほしい。そして強力な新人を、数多く迎えるに越した事はないが、彼等が入つて来る前に、現陣容でも、十分にやつていけるぐらい強いクラブになつておいてほしい。その上で新人を迎え入れる事が出来れば、まさに、鬼に金棒である。勿論これは、一朝一夕に出来る事ではないだろう。が、しかし、幸いにも現主脳陣で、二シーズン思ひのままにやれるのである。二年計画でやれば、何か新しいものを作る事が出来ると思う。およばずながら、僕もまだ自分の間は、学生の身であるから、協力には惜しまないつもりだ。今年がダメなら来年でもいい。必らず僕にした公約を、実現するために共に励もう。

「シーズン・オフに思うこと」

経済学部三年 木内資雄

六甲台のプールの改修の話が、大学の学生部から出されてから約一年になります。その工事も、現在設計中、四十三年二月着工と、予定より遅れはしましたが、四月には、浄化装置のついた新しいプールに生れ変わります。

先輩の皆様方、御協力、本当に有難うございました。また今後共我々部員の御指導の程よろしくお願いします。

さて、昨年のシーズンをふりかえってみると、心残りのする事ばかり、目についてなりません。もっと練習をしとけばよかったです。もっとよい記録を出したかった。またマネージャーとして、合宿ではみんなにもっとうまいものを食わせてやりたかった。等々。でも楽しいことも、多くありました。中でも最高によかったことは前にも書きましたが、先輩の皆様方の御協力で、浄化装置がつけられるようになったこと。この話、去年の春に、古林先生はじめ石井先輩、岡田先輩に御相談したところ、「結構、やろうではないか。可能性十分。」と言われました。当時は、まだ半信半疑でした。が八月から募金計画の実行に移り、十一月には、岡本先輩の御骨折れもあって、出来るというメドがたった次第です。

卒業されてから何年も、いや何十年も、水泳部のことを忘れずに尽して下さるとは。感謝しています。

次に来年度の抱負を少し。現在の三年生は、僕を入れて四人。うち一人、鈴木君は医学部。大変人数の少ない学年です。こんなこともあって一時は、もう水泳をやめちゃおうかなどと考えもしました。が、そんなわがままみたいなことなんか言っては申しわけないし、また自分自身がなげない。残る一シーズン、悔いを残さずやってみようと思っています。もっとも、こんな弱気になった原因が、もう一つありました。昨年の夏のことでした。ある女性にシツレンしちゃったのです。純な僕にとっては大きな、ショックでした。当時は、世の中すべてが嫌になりました。やることなすこと、見る事、聞くこと、すべて腹が立ちました。でもそれから一ヶ月、二ヶ月と過ぎるうち、心の痛手も、段々とうすれて来、最近はどうにか正気に戻ったようです。もっとも以前の僕とはどこか違ったようですけど。どこが違ったかって？ 経験のある人なら、わかるかも。何だか、話がそれたようです。

来年度は最後のシーズン。有終の美を飾りたいと思っています。なお次期マネージャーには井上与君がなります。先輩の皆様、現役の諸君、どうか彼をよろしく。

雑 感

吉 江 哲 郎

僕は学部の関係上、一年間休部したので、去年の事については全く書く事がありません。次方がないので、現在の心境でも書かせてもらいます。

去年の春、自分のクラブに対する気持は、自分でもはっきりしない位不安定なものでした。まず第一に学生生活の大半をクラブに費やす事の意義について。中学以来水泳部以外に関係した事のない自分にはクラブ水泳部であったので、水泳をやる事がどれ程の意味を持つのか、もっと他にやる事はないのか、等様な感情が流れていったものです。

去年一年のブランクの間、しみじみと感じたのは、運動不足による体力の衰え、それと共に水泳をやる事の素暗しさ。クラブをせず可能な運動と言えば、せいぜいボーリング程度のもので。これもすこぶる金のかかるせいたくな遊びであり、歯をくいしばって苦痛を乗切る事を要求され、それを成した後の満足感、すがすがしさに比較すれば、まるでないにも等しいものでした。

今年はお出来るだけ暇を見つけてはクラブの練習に参加しようと思っ

そうと思っています。

我が水泳部

E一八一六九 玉 置 明

主将の引継ぎと共に今シーズンが終った。一種の安堵感と来シーズンへの不安が入り混じった気持である。今シーズンが終ると同時に次のシーズンが始まっているのである。主将としてやってみることが数多くあるが、今の自分には唯全力でぶつかるといふ気持があるだけだ。

この世の中で「+」と「-」という等式が成り立つことは数少ないようだ。水泳の場合を考えてみても実力をそのまま發揮すれば、「+」と「-」となるが、我が校の選手は大部分「+」と「-」という不平等になつてしまふように思える。ここで考えねばならないのはいかに効率的な練習し、「+」と「-」の不等号を等号に更に反対向きの等号にするにはどうしたら良いかということになる。ただやたらに練習量を増やしても「+」と「-」となるとは限らない。練習をいかに効率的なものにするか？ この問に対し、人間の生理的側面からの追求、それに基づく科学的練習の実施もさることながら、現在の我々に最も必要な精神的エネルギーの集中が問題となるのである。この精神的エネルギーのはたらきとして精神力とい

う力が現われるのである。この効率的な練習と精神的エネルギーの間には多分に相関関係がみられる。結局、主将としていかに、やる気を出さすかが一大課題となるのである。

来年には、諸先輩がたの御尽力により、浄化装置付の改造プールが完成する予定であります。これからはあの汚い臭い水は先輩諸氏に楽しい思い出のいい材料を提供する範圍のものでしかありません。水泳が元来個人競技であるといつても、目標は水泳部単位のものにしたいものだ。特に水球チームとして来年遅くとも再来年くらいまでには、我が部史上最強のチームにしたい。ともかくも、競泳・水球の両部門において、来年は飛躍のエポックとしたいものだ。そのため我々が現在すべきことは来年のためにトレーニングにより猛練習に耐え得る心身を作っておくことである。

題名のない文

J 18 木 村 多加 緒

人間はうたらなんか目の前に目的がなかったら行動でけんもんやなあ。せやから水泳こそが自分のすることや思て、自分では他に埋めようのない時間の空白をそれで埋めてきたんや。何のためて、大学へ来るんやるか。ええとこへ就職して、ええ奥さんもろて、

幸せな生活して、せいでもって、ええ子を削って大きくするためやるか。そしたらなんのために、ええ子がいるんやるか、それはええ子孫を残すためやな、それで人間みんながええ人間になるためとちゃうやるか、せやけど人間みんなが、ようならうと、悪なるうと、そんなことわてには関係あらへん。せやけど、わてら人間ひとりひとりにできるこというたら、子供を削って大きくすることしかあらへんやないか。ほんだら人間のやらなあかんこというたら子供つくることだけなんやるか。子供作る道具に手と足とひつつけて誰の尻、追っかける、けったいな雌のどこへ行かんように脳みそ頭にいったんのや。なんとまあ、きたないもんや、そんなこと思てる時でも、ちょっときれいな雌が、よこてを通ったら、おんなじように、いやらしいめつきで、よだれ流してながめとるんや、しょうない奴やなあ。

汚ないゴミに首までつかり、いやおうなしに流されながら、穴のあいたポロぐつは、岸辺に咲いた、黄色い花をみつけた。青い空を背景に、くつきりと、何者をも寄せつけない気品が、彼女を高く、そびえさせていた。ポロぐつの、うつろな目の穴の中に、とび込んできた彼女を、必死になって、つかもうとした。でも、流れ込んできた、おがくすが、彼女に代って、ポロぐつの穴をふさいだ。彼は悲しくはなかった。ポロぐつは、三年前の野原の中で、彼が踏みつけた、空色の、小さな花のことを思いだしていた。

もう、過去も現在もない。彼の周りは、はてしなく透明な水であった。破れた穴の中から、エビの長い触覚が、二本、水中に突きだしている。

責 任

一八一—一八 以 西 吉 一

早いもので、四十一年度キャプテンの宮部さんに、入部早々、先輩に対する言葉使いが悪いと注意されたり、また、練習がシンドイといってグチをこぼしたり、その反対に、上級生によって、練習をサボっているということでシゴかれたりしたところの水泳部生活も、はや二年が過ぎてしまった。

そして、来たるシーズンには上級生として責任を負わねばならない位置におかれることになってしまった。

ところで、ここに言う「責任」とはどのような内容のものなのだろうか。

まず、上級生は上級生とおしまとまって何事にも対処しなければならぬし、来シーズンの目標に向かって下級生を引張っていかなければならない。僕の場合、サブキャップという役柄、クラブを統轄し、キャプテンの玉置を中心にクラブ全体を盛り上げていかなければならない。これは、言わば外から果せられた責任で、

これには他に、競泳会の先輩諸氏に対する責任、すなわち、伝統ある水泳部を維持・発展させなければならないということも含まれる。

しかし、自ら進んで身を投じた水泳部であるのだから、ここには自己の内部から湧き出てくる責任というものもなければならぬ。泳ぐからには速くならなければならない。試合に出るからには勝負なのだから勝たねばならない。すなわちそれが、水泳部に入部した自分に対する責任であると思う。

これは極端かもしれない……。しかし、必ず速くなり、勝たねばならないというものではない。自分なりに目標に向かって努力しさえすれば、それで責任は果たせられると思う。要するに、自分は速く泳げない、自分には能力がないのだなどと思つて水泳部を放棄するということは自分自身に対して無責任になるということである。特に一年生諸君は自分自身に対する責任をよく全うし、埋もれた才能を掘り出す意味においても、来シーズンは頑張つてほしい。

俺も、キビシク忙しい工学部機械科の授業内容を克服して、これからの水泳部生活を皆んなと共に送るつもりである。



私は水泳部員である

J一八〇三五 井上 与志男

「……無から有を生ずることが出来る。」昨年の春、私は神戸大学法学部に実に運よく入学することが出来た。試験合格の次には身体検査なるものが待っていた。三月の末日、私はわずかな誇り高き喜びと大いなる不安を持ちつつ（というのはもしかすると試験官の採点間違いかなかで合格を取り消されるのではないかと私は非常に不安であった。）神戸大学の門をくぐり身体検査の控室である経済学部の大教室で共に苦難の道を突破して来た百六十人の戦友達と順番を待っていた。まわりには戦友とは言え、見たことのない顔ばかりが、あるものは平然と落ち着き、あるものは入学の喜びを友と語り、又あるものは私と同じように不安げなまなざしを右に左に動かしている。そんな時、数人の学生らしき人々が部屋に入ってきて教壇に立ち何やら話しはじめた。なんとか言うクラブの勧誘である。私は退屈でもあったので何となく耳を傾けて聞いていた。一つのクラブの紹介が終ると思うと次から次へと入れかわり立ちかわり出てくる。大して興味をひく話でもなく少々うんざりとしていた時、ある一人のネズミ色のセーターを着た青年が元氣よく教壇に立ち大きな声で話し始めた。クラブ

へ勧誘するというよりクラブの厳しさを語り根性のない奴は入部せんでも良いというようなことを話していた。その人が昨年度の水泳部主将宮部さんであった。彼は言った「大学へ入って何かをやってやろうという元氣のある者は水泳部へ来い。水泳部に入れば「……無から有を生ずることが出来る。」」その時の話の内容を詳しく覚えてはいないがとにかくその勇ましい口調によって私の心の中に水泳部入部の決心が固まってきたことは今でもはっきりと覚えてゐる。それから数日後の入学式の当日私は胸を張って水泳部のノートに氏名を書いた。以来、早くも一年半の歳月が流れ、今シーズンも汗と水にまみれるうちに終ってしまった。水泳部に入部して二つのシーズンを過ごし、記録は大いに伸びたけれども並みいる選手達の中から抜きんでるには程遠い。しかし入部したあの当時から考えると確かに、無から有は生じたのである。

こと競泳に限らず、精神的にも無から有を生じたものは数多くある。そしてこれからも来年、再来年と二つのシーズンを有の上さらに有を生じさせるべく努力していこうと思うのである。

過去の二シーズンを通しての自己の向上に対する喜びもさることながら同時に今では離れられぬほどの愛着をこの水泳部に感じている私は今、胸を張って大声で言える

「私は水泳部員である。」と……

一 完

緑色の沼

P 18 沢内孝夫

雨が、降っていた。そして雨のため、あたり一面に、もやがかり、まだ四時だというのに、まわりは、もはや、夜のようなであった。僕のまわりには、誰もいない。前の方には、かすかに、僕の目的地が、見えてきていた。ゆっくり歩むクツ音も雨の音に消されていった。目的地に着くと、僕は、早速着換え始めた。誰もいない。雨の音だけが、まわりの静寂を破っていた。一つの雨滴が小さな渦を引き起こし、波が、おつかり合っていた。僕は、「冷たそうだなあ。」と思ひながらも、その緑色をした沼に足をつけてみた。都会から、やって来た者にとって、確かに、その緑色の水は、冷たすぎた。だが、折角遠い所からこの神秘的な沼に、はいるためにやってきたのだから、少し位は我慢をしなければならぬと思つた。そして、体をつけてみると、今度は、僕の鼻を異様な臭いが捕えた。臭い、何んの臭いだろう、今までに嗅いだ事のないニオイだ。そうして、しばらくすると、僕の脳裏にふっと、浮かんでくる事があった。それは、僕が小学校の時に見た死ガイであった。そうだ、この臭いは、あの時に僕の鼻をつかまえた物と同じだ。僕は、ゾーッとした。そして、もやにかすんで、はっ

きりとは見えない沼を見わたしてみた。が、別に何もなかった。水の上や岸にないのであれば、今、僕が身をつけている水の中だろうか。すぐに、水を飛び出そうとした。が、足が全然動かない。このままでは、死人に引きずりこまれて僕もこの沼のくもくずとなるであろう。僕は、必死に泳ごうとしたが、ただもがいてはいるだけだった。そして、もがけばもがくほど、僕の足を誰かが、引っぱって行くような気がした。そして、だんだんと頭や手が、水中に沈んで行く。水面の白さも、だんだんと緑色になっていく。もうだめである。意識もかすれてきていた。「助けてくれ！」と口で、叫ぼうとしても、声にはならなかった。

ふと、目がさめると、僕は水の中ではなしに、フトンの中でもがいていた。僕は、すぐにも、消え去ろうとする夢を、必死になつて思い出した。すると、次は、何故、こんなイヤな夢を見たのだろうかという問いが、頭のすべてを占めた。別に、無難かしい答えでは、なかった。それは僕の一番、重要な事、すなわち、水泳に関する事であった。そうなのだ、あの沼は、僕達、水泳部員がいつも練習しているプールなのだ。底の深い、緑色の、年中、冷たいプールなのだ。が、その特色あるプールも、今年で、もう終りだ。僕も、もう二度と泳げないだろう。そして来シーズンが始まる頃には、新しい浄化装置付きのプールが、出来ているはず

だ。確かに、今のプールは、すばらしいし、愛着もある。が、それ以上に来年出来る新しいプールに期待をかけている。そして、そのプールを基礎に、是非、今までになかったようなすばらしい水泳部を作って行こうと思う。

どう、御期待？

フ リ ー

二年 B 井 上 史 朗

何を書こうかといろいろ悩むと同時にいろいろと悩むことがあったし今もある。クラブについて、水泳について、勉強について、遊びについて、恋愛についてなど……………。

クラブについては、どういう考えで部員としてやっていったらいいかいろいろと考える。まず僕は人間である。だから食わなければならぬ。で、バイトをしなければならぬ(バイトは遊ぶためにもする時があるし、そのが多いが、実際は食うためと、遊ぶためとははっきり分離できない、なぜなら食う金と遊ぶ金は同じだからである。)次に大学生である。だから勉強もする、など考えると、百パーセント水泳に打ち込めない。やはりそれなりの限度がある。我々はプロではないし一母校のように専門でもない、かといって全然顔を出さないとクラブでは成立しないし、同

好会ではない、だからその程度が問題だがいろいろと考える時がある。

水泳については記録がのびないやみだけである。

勉強については専門に無きずであつたものの難かしい、でも興味は十分あり大学に五年間いてみっちり勉強しようと思ふ。又ゼミ決定が難かしい、どれもいいけどどれかにしなくては……会計方面はあまり好きではないけど経営、商学は広くすべてやりたい気持、まあなりゆきにまかせよう。

遊びについてはもっと何でも経験したい、何ごとも経験が必要である。いろいろといそがいけど、だんだんと経験しよう。

恋愛については最近とくによく悩む。今日昨日など最高に悩んだ。クラブの者は誰もが知つてると思うが今夏よりある女性が好きになりそれ以来悩みつづけである大体理想通りにはいかないものだよ。

いろいろと悩みがあるが人間だれしも悩んでその上で成長していくと思うといふことだと思ふ、もちろん悩みがなく育つというのは理想的かも知れないけど悩み抜いた上でそれを切り抜いて成長していくところにも利点はある。まあ人間だれしも悩む者だよ、ただ同じことを軽く考えるか重要に考えるかによってその度合が違ふだけだと思ふ。

悩むのはいいけど一人で悩むより誰かにうちあけた方がよい、明セキなる解答は得られなくとも気分がすつとする時が多いもの

だ。

じゃあ皆さんお元気で……………

美しい人へ

T 一八〇四九 堀 田 東 英

僕の青春はもう終わったと思っていた。

いつの日からか情熱という言葉忘れていた、と、

美しい人が

また来て下さいね、と言って下さった。

どれほどの深い意味をもった言葉であつたらう。

僕が言えなかったことを

あなたは言つて下さった。

僕はその瞬間から生き返つた。

太陽と青春と夢が帰つてきた。

憂うつよさようなら

美しい人よ。

あなたの瞳はなんと神秘に輝いていることか、
それだけで僕の生きていく理由になるのです。

E P I S O D E

A 19 得 丸 哲 士

入学時の各サークルの説明を思い出しながら、学生生活案内を

一頁一頁と捲る。入部するなら文化部よりも運動部へ入部しよう

と考えながらも仲々「これだ」と思われるものに出くわさない。

そのうちに現在部員数二十名という少人数の水泳部の説明があつた。このくらい部員数が少なければ先程との結びつきも親密で良

いものだと思いつつ数日が過ぎ去りそのような事も忘れてしまう。

しばらくして学校にも慣れてきたので、なんとなく六甲台まで足

を運ぶと木立に囲まれた大変汚ない池否、プールがあり四月とい

うのに皆裸になって掃除をしていた。「元気がいいなあ」と思

つて眺めているうちに興味が湧いてきたので覗いてみると（なん

となくイヤな感じ）鈴木さんがやって来て何やら言う。二言、三

言かわしているうちに水泳パンツを穿かされて掃除を手伝う破目

に陥つた。プールの隅っこで小さくなって掃除をする。水の冷た

さにもまして先遣の目も、この時ばかりは意外と冷たくみえたも

のだ——全くおもしろくなかつたね。その上、翌々日にはH O

L I D A Y ・ I N で初泳ぎ、これ又マイッタネ。ご多分にもれ

ず途中でダウン。この時を含めて、春期合宿や練習中に何度、退

部しようと考えたことか。しかし、練習を通じて——苦しかったけれども——何かを得た。おそらく皆なも同様であろう。もちろん、練習量が増すにつれて、講義の出席率は……。とはいえ、水泳が一人すなわち自分のみに頼らねばならないのは勇ましいスポーツだ。

Unchained Sentence

丁 19 子字麻 比呂志

五月まだ水は冷たい胸をチョビット濡らして飛びこむギャハ冷たい、手足がジーンとする。熱い風呂に入りたいなあ、あっ呼吸するの忘れてたカボッお茶の代りに汚い水腹一杯飲む、熱いコーヒ、アップアップしてアップが終る。これから本当の練習キヤップが名前を呼ぶ風呂に入りた、熱いコーヒ、先に泳ぐ人の顔見てる、俺もこんな顔して泳いだんかな、いやたなあ冷たい雨コールする時いい気持、あなたが込んだ小指が痛い。包帯しよっと。俺の番になる飛び込む前からガタガタ骨がバラバラになりそう、投身スタイルで飛び込む、それでも水から顔出すと少しずつ前に進んでる熱い紅茶早くむこうの壁がこないかなあ水の中に白い線が見える。間もなく壁に手が当るやっ和二五メートルターンするとき又お茶の代りに水を飲む内も外も冷たいばかり、レモンテ

ィこんな調子で四〇〇メートルも泳ぐのだから上った時は水腹と疲れてグッタリ、全学連、終りの体操をやる一番嬉しいロープをあげる余りおもしろくない、食堂へ行く楽しい。ハタハハハ、薄暗い空を見上げてバカ話、丸出だめ夫、バスに揺られて寮に帰るボタンと倒れてそのまま寝る。おそ松君、チビ太で来い、おでんやるぞ。五月まだ水は冷たい胸をチョビット濡らして飛び込むギャハ冷たい、青島だあ、ちばけるなこの野郎、三時限の授業終るブラックコーヒたいぎだなあ。三時十分前学館の階段、これ作った奴ここ登ったことないんじやあないか？ 二日酔、プールのガタガタやっている、水腹一杯、食堂楽しい、寮に帰るボタン、おでんいらねえぞ。五月まだ水は冷たい胸をチョビット濡らしてドボンギャハ冷たい、三時十分前学館の階段、水腹一杯、食堂楽しい、寮に帰るボタン、ウタリだ。好きな彼女の眼の上にほくは書く、いともしれいなガンツォーネ、彼女の可愛い口の上に、ほくは書く、ほんに上手なテルツイーネ。好きな彼女の頬っぺたにほくは書く世にもすばらしいシュタンツェン。その上彼女に心臓があったなら、いきなソネットを書くのだが。十月八日羽田デモ市街戦始まる、警官石が当って痛いだろうな、カール・マルクス、エンゲルス、学生警棒でなぐられて痛がるうな、ケインズ、ワラス、サムエルソン、新聞にでかでかでてやがら、飛行機に乗ってニコニコ笑ってるオッサンはだれだ、だれに向って笑ってるんだ。おや、ここには川に落っこちている奴がいらあ、水飲んだん

だろ、熱いコーと飲みたいだろ、何もない世界で思い切り。

(児島障史)

水泳と俺

A 19 芳 川 雄 二

俺が水泳部に入ったのは、七月ごろだった。あの六甲台の背空のもとに、青いプールで水しぶきを上げてる光景が今も残っている。

その光景に心をうばわれてプールへ入っていったのが、もう九月となってシーズンも終わろうとして、こんなものを書くに至った。

もともと作文きらいの俺に、原稿用紙三枚も書けといってもかけるわけがない。だが書けとのことだ。さすがの俺もあのころ物思いにふけていた。元来俺は単純に出来ていて実に考えることが少なかった。それだけ、田舎に育って、平々凡々と自然の中で刺激が少なかったのだから。それは体の面についてもそうだった。まともなスポーツを俺は身につけなかったし、どれ一つやれないことはないというぐらい、浅く趣味的にしかやっていなかった。水泳部に七月ごろになって入ったのも、あのころの物思いの中に、俺は、かって、趣味的にしかスポーツをやっていないので、大学に入って一つのまともなスポーツをやろうか、それとも、すきな

ときに、すきなスポーツを簡単にやろうかということが片隅にあったので四月からのびのびになって、いたのだから。一応下手でもやっぱり、読者に共感してもらいたいと思うのが当然である。まあ少々慾をだしてそれから書きつづけると、入部したその日、すぐプールに入って三百メートル平泳させられた。ながすことを知らない俺は、息がきれそうに、又水もガブガブ飲んで、どうにかこうにか、くるしまぎれについた。

だがおかしなことよ、泳いでいると、くそしんどい思いがするのにはプールからあがるとなんともいえなくなつて、又泳いでみたくなるのである。好きでやっているスポーツに共通する点は、運動した後のなんともいえない、こころよい、征服感が原動力になつていふところ。みんながすいすいと軽く泳いでいるのをみて、不格好に端で泳ぐのは、なかなか、しんどいものである。始めはポツリとして、クラブから孤立しているような感じがしたのも当然である。

ところが、良い先輩諸氏の明るいうーど、解放的ムードは、しばらくすると、俺の不安な心を、どこかへふっとばしてくれた。俺も一つづつぐんに泳いでやるかと思えるようになったのも、ありがたく思っている。そのようにして平泳ぎを長くしていたが、八月も末になったころ、フリーをやれといわれて、大変だった。生まれでこのかたバタ足何んか使ったことのない俺はなかなか大変だった。又、顔つけて泳ぐくせのついていないのもそうだった。

二、三日立って八百メートル泳いだのは目の回るような思いだった。このようにして九月四日の京阪神ジュニア戦がやってきた。神大が優勝だった。そのとき俺も五十、百、二百とベストつづきで大変気持良かった。

まあどうにか、こうにか原稿用紙をうめることができた。ああ忘れていた、俺は自由型にかけてみる、と今日誓った。

DASH かさばりかそれが問題だ

T 19 末 光 英 和

どうにかこうにか神戸大学に入學して、何かクラブに入ろうと思っただけであれこれ考えていたが、結局は、高校のときにやっていた、といっても記録も全然冴えず、まわりからは水浴部などと、言われていたのだが、水泳部に入ることにした。前述のように、まわりから水浴部などと、言われていたのだから練習も大したことはなかったの、神大水泳部に入って苦しいことの連続であった。でも、高校の時と違い、何かにつけて飲む機会も多く、楽しい事も多かった。

大学に入る前は、大学に入ったら勉強もしないで、クラブばかりやって、試験前にチョコチョコと勉強すれば、単位はとれるなどという先輩の話を信じて、真面目に授業をさぼっていたら、試験

前は、ヒジョーニキビシイかったのよ。あらあんた知らなかったの馬鹿ねオホホーなんて後の祭りだった。だから、後輩には、練習は当然真面目にやらなあかんけど、勉強もある程度はやっつけと、良き先輩ぶりを発揮しようと思っっているのである。

ここでちょっと堅い話になるかもしれないけれど、いままでも水泳をやってきて自分がどういう気持でやってきたかを書いて見ようと思う。

我々は、自己とが世界とかいうものを、ともすればあるままに固定的実在として考えようとする。自分というものを、ある超時間的な自己同一存在として考えようとするのであるが、このような自己が本当に生きて動いている現実の自己でないことは、いまでもないことである。そこで、自己の実存を肉體行動の中に見い出そうとする態度が、でてくるのであろう。精神行動のうち自己を把握していきたい自分なのであるが、その徹底性を欠いた自分を発見する度に、肉體の運動、つまりぼくらの場合であれば、この水泳部という集団における練習なのであるが、練習をして疲れ切っているとき、初めてああこれが自分なんだと認識できるような気がするのである。何か本を読んで、その筆者のことで考えるのではなくて、自分の肉體が自分で運動して、ここに

あるのだから。しかし、現在ぼくの場合には、水泳における練習には、なんら社会的実践性なんて、あり得ないと思えるのである。だから、ま

だ他にやらなければならぬことが、いくらでもあるように思えて、水泳を続けていくことに疑問を感じながら、惰性からか、水泳を続けているのである。でも、そんなことを思ったって水泳をやめたら、何か他の事ができるのかと思うと、やっぱり何もできないのではないかとも思うのである。

まあいろいろとごちゃごちゃ書いてきたけれども、ぼくは泳ぐことが好きだし、記録が上がれば嬉しいし、練習の後の充実感も得られるのであるから、それでいいのだろうと、また妥協して惰性？の中に入っていくのである。

ある日の思い

Ｔ一九一七八 小林 育 夫

今日も僕は、三時限の授業が終ると、自然とプールの方へ足が向く。

今日もいつものように、練習でしんどい目に会うだろう。いつものこと、このままさぼってしまおうか。そうすれば早く帰れ、パチンコも仰山できるし、勉強もしかり？ 色々と心を誘惑する考えが、次から次へ、浮んでくる。結局最後に考えることは、水泳部活動をやって、どれだけ自分にとってプラス点があるのだろうか。一目、鼻、耳、内臓諸器官に悪いから、毎日毎日水に入る

のだけは、やめなさい。」母の言葉である。「色も黒くなるし、せっかくの男前が下るわ。」彼女の言葉である。(信すること難しいと思う。) 「そんなにしんどいものなんかやめて、その分だけバイトに向けて時間を有効に使え。」友人の言葉、等々

僕がクラブをやることに対して、回りの人の意見は、余り賛成意見も多いものでもない。僕も彼らの意見に対して、なるほどと感ずるところもある。しかし、大学生活におけるクラブ活動としての、水泳部をそんなに表面的にだけ、見て良いものであるうか。六甲台へ登って行く階段の途中ふと立止まって考えた。確かにそう言えば、体育系、文化系を問わずあらゆるクラブ活動への批判、かつ反対意見となるであろう。クラブをやること、そんなに目の先の表面的なことだけにだけ目を向けて良いものであるうか、そうではいけないと思う。

例えば四百米の途中、百五十米付近で、心に浮んでくる「もう、このまま上がってしまいたい。」という心をふり払おうとする一方の心、即ちこれが、根性、粘り、強さというものであると思うが、この根性も練習中自然に付いてくるのではなからうか、そしてこのものは、我々が社会に出てからも、絶対に必要であるし、もし十分身に付けていなかったら、決して世の中をうまく渡れないし、偉い人間とはなりにくいであろう。故にこの根性を身に付けるだけでも、前に批判に対抗するだけの効果があるのではなからうか。その上、友人、先輩も多く出来て、人間関係が広がり、

僕自身人に対する視野も広げられるのではないだろうか。確かに大学のクラスという組織内だけでは、友人関係も少ないし、その結果吸収される教養というものも、限られて、くるのではなからうか。

色々なことを考えていると、もうプールの下迄きてしまった。その時には、競泳本来の目的である、少しでも速くなって、自分の記録を伸ばして行きたいという考えで頭の中は一杯になった。よし今日もまた、真面目にやって(?) 一秒いや〇・五秒でも良いから、タイムを縮めよう。水泳に徹する男の考えである。
ガチョン

感想

S 19 岩 切 博

輝く太陽の光を反射して、きらきらと光る水に挑んだ日々が過ぎ、もの悲しい秋がやって来た。この時に臨み、今シーズンの感想を記しておこう。

何故に、人は泳ぐのか。もちろん、そんな理由などない。泳げるから泳ぐのである。動物の本能とでも言うべきか。幼い頃、遠く、遙か彼方に、白嶺の神々しい富士を見、行きたい登ってみたいと思つたその感動、それと同じ感情で泳ぐのである。その感

情はまた自分を鍛錬し、強くなろうという気持を含むのである。そして、そこには一かけらの功名心もないはずだ。心の奥底から湧き起つて来る純粹な感情、自己の人間としての肉体的、精神的向上を目指す心にとって、自己一人が問題なのである。自分との戦いなのである。そして記録は、その克服の歴史なのである。

私は今まで数年間、水泳をやつて来た。ところが、印象に残っていることの多くは、試合で負けた時のくやしきである。全力を出して負けた時である。もちろん、全力を出さない時など話にならない。人々は、くいが無いと言うだろう。なるほど、それも、もつともな事である。十分に正しい。しかし、それは現実を避けた責任の転化だ。精一杯やったのだから仕方がないというのは、現実からの逃避にすぎない。事実をまざまざと見つめ目の当りに現実の厳しさ、冷たさを感じ、実力の及ばないことを見せつけられる時、そこにはどうしようもない、暗い、冷たい孤独があるだろう。非常な淋しさだ。だから勝負には負けてはならない。試合は絶対勝たねばならないのだ。

私個人としては、このシーズン非常におまつで、申し訳なく思っている。実際、記録は、ベストよりほど遠く、専門種目も常に変化して、一貫した練習ができなかった。すべて、来シーズンにかけ次第である。

水の話

S 19 玉木 喜代明

僕は水泳中毒症だ。長い間泳がないと、無性に泳ぎたくなる。それでたまらなくなって入部した。ところが練習第一日目から後悔しはじめた。なにしろ、プールの水をつめたいこと。それに練習の時、諸先輩方の、下級生に対する態度のつめたいこと。身心共にちぢみ上ってしまった。

やっと水がぬるみ始めると、今度は、プールの水のごれが気になりはじめた。聞けば年二回しか水を替えないとのこと。しかし、集中豪雨の時、変なくあいになって、水はシーズン始めに替えたきり。落葉の中を泳いでいるため、落葉が頭にひっかかり、文字通りカッパスタイルで泳いでいる。そうしているうちに、水には味と臭がついてきた。たしか、便所は部屋の中にあるはずだが……。プールには蚊が多いと思ったら、プールにボウフラが……。でも水が汚なくても、悪いことばかりじゃない。この水で鍛えられた僕たちの胃腸は、赤痢菌なんかにはビクともしない（来年はプールに浄化装置がつくそうだ。これで神戸市の蚊も少なくなるだろう。）

このシーズンを見て、シゴキは、新人にとって有益なこと

だと悟った。（ホントヨ）来年は新一年生も入ってくることだし、一つ僕も……………。

水泳部にはいって

P 19 S・O H A S H I

自分の体を見て、つくづく、「やせたなあ」と思う。現在私は、逆三角形のスパラシイ？体である。四月、水泳部に入った時はなんと七六匁あった。肥えていて先輩たちから、ヤセルのはすぐだと言われていた。が、病的？なヤセ方で、生まれて初めて夏ヤセを、経験し今では六四匁、胸囲が落ちてないのがうれしいが、すこし気味がわるい。神大の女子学生をスマートにするために、美容教室を開いて、その先生になれるくらいの資格はあるかもしれない。

やせるペースほど、記録は上らず、少し気分が悪いが、六月初とそう大差はなかった。練習は真面目にしたはずだが、得丸、小林両君に追いつかれてきた次第。えらいこっちゃ。

このシーズン中の生活は、ただ水につきり、食べ、寝るだけの生活であったが、得たところも多かった。現在、いや夏休み、私は自分のしたい事と水泳との両立に悩んだ。それでクラブはやめようかと思った。今でも悩んでいるが、まあ両立できるようにや

ってみよう。できなくなつてから考えても遅くない、という考えである。このことで僕にはよきアドバイスをあたえてくれる先輩に感謝し、相談相手としての友人がいることを心強く思った。高校時代の友人は大学内でのことに關してはあんまり役に立たない。水泳をしているといえば自分の時間がなくなるだろうから、やめてしまえというような感じである。すこし、おもしろくなかった。しかし大学、それもクラブ内に自分と同じような人間が多くいるのだと思えばなんともなくなつた。来シーズンもやってみようかなあと思っている。

好きなんだなあ

B 19 坂 元 正 広

好きなんだなあ、僕は、水泳が。

一番好きな勉強よりも好きなんだ。合宿で一週間も授業をサボったり、夏休み、普通の練習に参加するために、母ちゃんには親不孝と言われ、女の子には「冷たいのね」などと言われながらも決められた八月十四日に帰ってきたり。夜行列車で一睡もせずに十二時間揺られてきて、その足でプールへ来て練習するなんて、好きでなければできないよね。

「好きこそものの上手なれ。」

「下手の横好き。」

勿論、僕は後の方だけど、それでもいいんだ。「上手昔より上手ならず。下手いつまでも下手ならず。」まじめに練習していれば、そのうちに少しは速くなるだろうなどというささやかな望みを持っていくから。(やっぱりだめかな？あれほどコンビが悪いと言われながら、いまだに治らないんだから。)

でも、今だからこんなことが言えるのであって、夏休み前は随分悩んだものだ。

高校の時よりずっと真面目に練習しているのに、記録はいっこうに伸びないし、おまけに上がつかえていて、少しくらい速くなつても、大学にいる間は試合になんてとも出られそうにないし、自分の自由が時間が少なくて、大学に入ったら是非やりたいと思つていたことが充分でなくなつたりして、クラブをやめようかと思つたこともあつた。しかし、シーズンが終つてみると、やはり何か寂しい。折角できたいい先輩や同輩と別れるのはつらい。(ゴリゴリ)

それに来年は新しいプールもでき、浄化装置もつくそうだ。そうすれば、シーズン中きれいな水で泳げるだろう。そう思うとたまらない。

そして何よりも、今シーズン本意な記録で終つてしまったことが、僕を離れ難くさせている。僕は今シーズン、新潟で高校の合宿に参加し、神戸に帰ってきてから、やっと去年のベストを出し、

調子もあがってきた。

練習している時は、精一杯やっているつもりであったが、シーズンの終りになってやっと調子が出るといふのは、今になって考えるとやはり練習不足だったのでないかと反省される。もう一度、許される限りにおいて体力の限りを尽して練習してみたいと思う。若いんだなあ。

僕は、試合で他人に勝つことはできないかも知れない。でも、自分で立てた目標を達成するために一生懸命努力し、そしてその目標を段々と高めていく、すばらしいことではないか。ゴツウ楽しいやん。

僕はこの楽しさを求めるが故に、またあの苦しい練習に参加しつづけるだろう。

山代合宿の思い出

B 19 坂 元 正 広

高校では四月の末頃から泳ぎ始めていたのだが、その時に一番辛いのは練習よりもむしろ水の冷たさだった。

大学でも、なんとなくまた水泳部に入ってしまったが、ちょっと高い所にあるあのプールを見て、水はどんなにか冷たいことだろうと恐ろしかった。しかし、合宿の予備練習をやったホリディ・

インのプールも、山代のプールも温たいと聞いて、束の間の喜びを味わったものだった。

四月二十九日午前八時、大阪駅中央口に集合。日頃見なれない先輩達の学生服姿に何となく威圧感を覚えた。

おんぼろ列車を乗り継いで着いた宿泊所が何と観光温泉センター。その日の午後早速練習。第一日目の食事が結構良かったので期待していたにも拘らず、こっちのスタミナの低下に比例して食事も悪化の一途。女風呂をのぞいたのは、そんな不満からなのかも知れない。(僕は関係ないよ。) 練習は、高校の合宿に比べたら、割合楽なものであったと思う。しかし、案だと感ずるということ。は即ち、自分の全力を出し切っていないということであり、その結果が、今シーズンが不本意な記録で終わってしまったことに現われているのだと思う。

練習についてはあまりよく覚えていないが、三日目頃から膝が痛くなったのを覚えている。キャプテンに、プレストなら必ず一度はそうなるのだから心配しないで練習しろとは言われたものの、ビートに全然力が入らず辛かった。

もう一つ、それはポロ。

山代合宿で初めてポロなるものを練習した。巻き足、蹴り足、壁ポロ。特に辛かったのは巻き足。我ながら自分の不器用さに愛想が尽きた。しかし、初めてやる事への興味はやはりあり、「よし、一生懸命練習して、うまくなるう。」と、その時は思った

のだが、残念ながら、今シーズンはあまり上手になれなかった。
「よおし、来年こそ。」

五月四日午後二時現地解散。

第二回合宿

子字麻比呂志

あの時計ぶっこわしゃあいいのに、のろまな音出しゃあがってチリチリなってやがら、もう少しじっと横になっていたんだよ。髪もバサバサダシ、手足は他人の物みたい、何をするのも億却だ薄いフトンだけどこは天国だ眠るといことがこんなにすばらしいことだと思わなかった。メシなんてほしくないよ、もう一時間眠らして、でもキャップの「行こうけえ」という声を聞いてしぶしぶ立ち上る、彼の声を聞くたびいやな気持ちになる。

合宿のうち一番いやな練習は早朝練習だ。例によっていやな時計の音とキャップの声で目をさまし、ハートチャンもオツムチャンもはつきりしないのに水の中にいるんだもん。ハートチャンなんかドッキンドッキンして、もう少しでおネネするところだった。

水泳始めてまだチョビットしか経ていない俺から見ると、先輩たちはまるで鉄人（哲人にあらず）のように思えてしょうがない。

朝早くから、夕方まで俺が今にものびるかと思うような時でもガ

バガバ泳いでいるからね、まあ先輩たちも人間であるに違いないのだからへべるんだろがそれにしても表情に余りでないところなんかリッパとしか言いようがない。合宿の初日は昼ごろからだったので割合元気にやってしまったが二日目からもうダメ、起き上ろうとしても体中の力がすうっと抜けてたみたいで、歩くのもギクシャク、うつろな目をあけてあのだんだら坂をヨチヨチ登っていく、トレパンのスソを地面にすりつけ、うなじをたれて。山代の合宿以来二度目の合宿だから週刊誌を読む余裕があった。なにしろ山代の合宿の時ときたら水が怖いばかりで練習が終るとガククリとなってそのまま次の練習まで起き上がることがなかったぐらだから、でも練習量からいくと今度の合宿の方がきつかったみたい、七月に国公立対市大、関西インカレと続いていたから当然だと思うけど、今度の合宿はしかし、終わった後から思うと本当に楽しかった。集団の一人になることはやさしいが、その集団の動く方向にそっていくことはやさしいようでむずかしい。合宿中はそんなことを考える暇さえあやしない。でも合宿はガムシヤラにやってこそ合宿の合宿たる所以があると思う。月並みな言葉だが苦しい後の楽しさは格別だ。異議なし。



関西国公立戦について

得丸哲士

私のようなものが、関西国公立戦の原稿を書くよう命令されたのは、真に光栄？なことであるが、これは別に私が文才に優れているからなのではなくて、他の原稿を定められた期日までに提出するのを怠ったが所以である。とはいえ、書かねばならぬ以上はすばらしいものを、と思えども、各選手の成績とちよっとした美辞麗句を載せれば他に書くことがないのが、一般に感想文の共通点であるので私もそれに従って書くことにする。

各選手の成績は次の通りである。

関西国公立戦の記録

Free	800米	玉置	11分58秒4	(5位)
Breast	100m	鈴木	1分16秒8	(1位)
	200m	〃	2分51秒6	(1位)
Back	100m	木村	1分14秒7	(2位)
	200m	木村	2分40秒5	(2位)
	400m個人メドレー	沢内	6分15秒8	(3位)
	400mメドレー	(木村・鈴木・熊岡・玉置)	4分59秒5	(4位)
	800mメドレー	(木村・玉置・以西・沢内)	10分22秒5	(5位)

私にとっては、このような大試合に臨むのは初めてであるので、少々驚嘆し、不安でもあった。その上、私は遅刻したので口も充分出来ず……。しかし、本番になって、すばらしい選手が、すばらしく立ち並び、すばらしいプールの中で、すばらしく泳いでいるのを眺めるのは、さすがにすばらしかった。その時の水音は私の頭に音楽を稱妻のごとく光明させてはまた行ってしまふ。ただ、このような大試合において、予想外に我が水泳部の成績が悪かったことに、何だか色のない切ない恋というようなものを感じる。

今になって考えると、もともと、私を含め大部分の人間は真心より優れることに憧れる者である。一個の部員となつて、その部員の骨子たらしめんとするものは『自己に対する厳しさ』である。一枚の紙のみはってある組子のない障子は春風を心地よく受けて、ふわりふわりとしていても、夏が過ぎ、冷い秋風が吹いてくるときは寒さが堪らない。このとき気がつく何か確然としたものが組子、すなわち『自己に対する厳しさ』である。だから、こうありたいと願うものは夏の間、否春からすでお互いに血眼になつて『厳しさ』を探している。だから当然、内容の如何を問わず、ある厳しき練習に接したとき『ハッ』として立ち止まる。このとき、いいしれぬ感情が湧いてくる。

ひややかに　みずをたたえて　かくあれば
ひとはしらじな　ひをふきし　やまのあととも

我々とて、どんなに長く居たくとも八年たてば神大ともお別れだ。深く自愛し、そろそろと路なき路に進むがよい。そうして、不拔の高き塔を打ちたて、その塔をして旅人に向い百年のちまで『ここに男ありて、……』と必ず必ず物語らせようではないか。

インターカレッジ

T 19 末 光 英 和

七月十七日、十八日 於大阪プール

すぐ後に三商大はひかえているが、九月までは試合もなく、このインターカレッジに全力を注いで、是が非でも、一部昇格をと練習に励んできた。

試合当日には、キャプテン以下一同が、今年ほうまいこといつたら一部へ上れるだろう、という期待で闘志満々であった。が、試合の経過とともに、どうしたわけか、以外な松山商大の活躍で、なんとしても二位は確保しなければという気持ちに変わっていった。結果は、一点差ではあったが、なんとか二位を確保したけれども、一位京大との差は、非常に大きく、この試合を、来年の礎にするというのは少々難があるかもしれない。

しかし、我々は、一層奮起し努力を重ねて来たるべき一部昇格を、我々の手でかちとろう。

自由形	八〇〇米	玉置	一分二七秒五 (五位)
平泳	一〇〇米	鈴木	一分一四秒七 (一位)
	二〇〇米	鈴木	二分四八秒四 (一位)
背泳	一〇〇米	木村	一分一五秒〇 (二位)
		玉木	一分二〇秒一 (五位)
		福田	一分二〇秒四 (六位)
	二〇〇米	木村	二分四一秒〇 (一位)
		福田	二分五二秒二 (五位)

個人メドレー 二〇〇米 熊岡 二分五一秒四 (三位)

四〇〇米 沢内 六分一八秒二 (五位)

四〇〇米メドレーリレー (木村・鈴木・熊岡・沢内) 四分五五秒一 (三位)

三商大

P 一九二〇五 大 橋 進

七月二十二日朝八時、我々神大水泳部の精鋭十六名は、三商大戦総合優勝をめざして、新大阪駅から一路東京へ向って出発した。昼すぎ (三時ごろ)、目的地の一橋大学へついてすぐプールへ行って泳ぎました。水は冷たく、体がしまる感じがした。

あくる二十三日朝十時より試合が始まったが、朝から、多数の

先登たちがおみえになっていた。試合は、まず競泳部門から行なわれたが、一橋大と市大がフリーにおいて、得点のくい合を演じて、そのすきに神大が優勝したという経過であった。神大は四〇〇m混継泳ブレスト、バック、個人メドレーで一位置をとったが、フリーはどれも一位がとれなかった。特に八〇〇m継泳では三位となった。それに対し市大、一橋大のフリー陣のレベルは高かった。水泳においては自由形陣の強いところが、全体として水泳の強い所だというが、その点においては神大は強くないということである。来年のフリー陣、バタフライ陣の成長をまつばかりである。

ポロは昼から行なわれ、市大戦の時は、やりなれている（ポロリーグ、市大戦）から、その実力のほどがわかつているので、我々一年生の補欠（私と玉置君）も試合に出させてもらっても勝ったが、一橋大戦のときは、ベストメンバーで向ったのに、ポロリーグの立命大戦の時に大きく敗れた。一橋大と好い勝負をする東京学芸大ではポロのために二ヶ月間練習をするということの後で聞いたが、やはり練習量がちがうのだろうと思われた。来年はポロをもう少し力を入れなければ、一橋大との差は開くばかりだろうと思われる。ポロがフリー陣を強くすることだって考えられると思った。

四〇〇m混継泳 一位 神戸大 四分五四秒一

木村・鈴木
熊岡・以西

二位 一橋大 三位 市大

八〇〇m自由型 三位 玉置 明 一分一〇秒三

四位 沢内 考夫 一分三〇秒一

（一位 井上幾久男（一橋大）一分二一秒二 大会新）

二〇〇m平泳 一位 鈴木俊彦 二分五二秒七 大会新

三位 菊田修三 二分五六秒六

二〇〇m個人混泳

一位 鈴木俊彦 二分四〇秒五 大会新

三位 沢内考夫 二分五〇秒三

二〇〇m背泳 一位 木村多加緒 二分三九秒〇 大会新

三位 福田大武 二分五一秒九

一〇〇m自由型 三位 木村多加緒 一分〇五秒三

五位 以西吉一 一分〇七秒二

（一位 和久雄（一橋大）一分〇三秒一）

四〇〇m自由型 二位 玉置 明 五分一八秒一

六位 大橋 進 五分五〇秒六

（一位 福永 生（市大）五分〇七秒七 大会新）

二〇〇m蝶泳 三位 熊岡禎二 三分〇六秒八

六位 玉光英和 三分二〇秒〇

八〇〇m 継泳 三位 神戸大 (木村・沢内・玉置・以西)

一位 一橋大 二位 市大

一位 神大 六五点

二位 一橋大 六三点

三位 市大 五〇点

水球 大阪市大 (三・九) 神戸大

一橋大 (二八・〇) 市大

一橋大 (九・一) 神戸大

近畿地区国立大学体育大会

玉 木 喜代 明

九月二日、国鉄大阪駅から全員揃って、大津の市営皇子山プールへ。昨年はこの試合に総合優勝したんだそう。しかし今年は、一部に昇格の決定した京都大学がいる。それで、二位確保のつもりで試合にのぞんだ。

大津には下車したが、どこへ行っているのかわからない。駅前の地図を見て、さかんに議論したが、結局タクシーで行くことになった。のどかな出陣である。皇子山プールに着いて、プログラムが配られたが、どうした手違いか、エントリーがでたらめである。結局抗議が認められて、新しく提出したエントリーによって

試合が行われることになった。試合は鈴木さんと、木村さんが、大会新記録を出したが、一般に平凡な記録に終わった。そのために阪大にくい下られ、泳法違反による逆転負けをした。この試合は特に泳法違反による失格者が続出し、審判のきびしさと共に我々の未熟さをも感じさせた。この試合は、シーズン終りのものでもあり、盛り上りの少ない試合であった。しかし、競技進行、放送など競技運営の面において、また選手の未熟さなど感ずる所の多い試合であった。

主な記録は次の通りです。

総合一位 京都大学

二位 大阪大学

三位 神戸大学

以下省略

個人メドレー四〇〇米 六位 熊岡 六分四〇秒一

メドレーリレー四〇〇米 三位 (木村・鈴木・大橋・以西) 五分〇三秒九

フリー一〇〇米 六位 以西 一分〇九秒〇

四〇〇米 二位 玉置 五分三二秒五

五位 沢内 五分四六秒一

八〇〇米 二位 玉置 一分二三秒一

平泳一〇〇米 一位 鈴木 一分一八秒一

七位 菊田 一分二三秒〇

平 泳二〇〇米

一位 鈴木 二分五秒八

(大会新)

バタフライ一〇〇米

七位 岩切 三分〇七秒五

二〇〇米

六位 熊岡 一分一八秒五

バック一〇〇米

八位 熊岡 三分二九秒一

二〇〇米

三位 木村 一分一六秒三

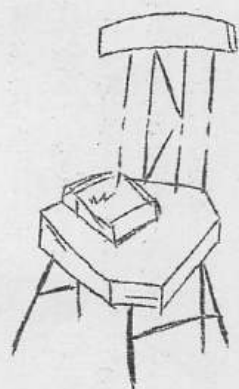
(大会新)

五位 福田 一分二〇秒四

リレー二〇〇米

四位 福田 二分五三秒二

二位 (木村・鈴木・以西・玉置) 一分五七秒四



個人ベストタイム表

1967年度

氏名	学年	種目	100 m	200 m	400 m	800 m
玉置 明	2	free	1-06-3	2-28-0	5-14-3	11-01-7
前田 信雄	3	〃	1-12-4	2-46-2	5-59-6	13-10-0
沢内 孝夫	2	〃	1-07-7	2-32-0		11-28-7
以西 吉一	2	〃	1-07-2	2-42-0	5-51-5	12-59-6
井上 史朗	2	〃	1-12-8	2-47-3	5-59-6	12-59-5
井上 与志男	2	〃	1-19-8	3-05-0	6-44-0	13-45-0
大橋 進	1	〃	1-12-9	個×2-58 2-38-0	個×6-32-8 5-50-6	12-05-0
得丸 哲士	1	〃	1-17-2	2-55-0	6-22-4	13-49-0
小林 育夫	1	〃	1-15-2	2-56-7	6-26-0	
芳川 雄二	1	〃	1-27-3			
鈴木 俊彦	3	Brest	1-14-7	2-48-0		
木内 資雄	3	〃	1-25-0	3-13-0		
菊田 修三	2	〃	1-19-4	2-56-6		
陳 東瀛	2	〃	1-25-2	3-09-0		
坂元 正広	2	〃	1-26-0	3-10-2		
吉田 晃	2	〃	1-52-0			
小出道 夫	2	〃	2-06-0			
岩切 博	2	free Brest	1-14-2 1-25-0	2-51-0 3-07-5	6-35-0	
熊岡 禎二	3	Butterfly	1-17-0	3-05-0		
末光 英和	1	〃	1-23-0	3-20-0		
木村 多加緒	2	Back	1-14-0	2-39-0	5-40-0	
玉木 喜代明	1	〃	1-20-1	2-55-8		

会 計 報 告 第 1

凌泳会、収入の部

前年度繰越	18,000		
凌泳会費	152,000	(104名)	
寄付金	34,000		
会合費	48,000	(吉林先生謝恩会 OB 1500×25 現役 500×21)	48,000
<hr/>			
計	252,000		

支出の部

凌泳発行費	29,880	(印刷費21120 発送費8190 雑費570)	
水泳部援助	140,000		
会合費	51,100		
交通費	12,020	(4月2750 8月8340 東京 12月930)	
通信費	14,705	(4月2570 5月1930 6月2350 9月3955 10月2500 12月3400)	
雑費	1,125		
次期繰越	3,170		
<hr/>			
計	252,000		

会 計 報 告 第 2

水泳部、収入の部

1	前年度繰越	15,562	
2	部 費	16,500	
3	合 宿 費	205,180	(4月山代127680 6月46000 7月31500)
4	競泳会援助	140,000	
5	育友会援助	39,000	
6	会 合 費	77,300	(山代コンパ 9月月見の宴 11月退出コンパ) (7000 15000 45100) 12月忘年会 10200
7	交 通 費	3,780	(近体の交通費は大学学生課より援助)
8	雑 収 入	3,300	
計		461,622	

支出の部

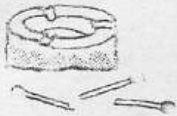
1	水連加盟費	9,400	
2	試 合 費	22,350	(4月近キ室内 6月京阪神 7月インカレ 8月兵庫インカレ) (4000 3730 2000 1060) 8月全国々公立7000 9月三商大2560 近体2000
3	合 宿 費	287,732	(4月山代189282 6月72180 7月26270)
4	会 合 費	92,010	(4月山代コンパ11740 6月コンパ5000) (9月月見の宴16500 11月退出コンパ47570) 12月忘年会11200
5	設 備 費	4,280	(時計修理3400 デッキブラシ他880)
6	交 通 費	10,988	(4,5月2780 7月インカレ2840 9月近体5368)
7	通 信 費	1,455	
8	燃 料 費	4,750	
9	医 薬 品 費	6,060	(カルキ4800 その他1260)
10	雑 費	8,070	
11	消 耗 品 費	4,193	
12	記念品費及 び謝礼 他	7,670	(4年生4000 古林氏1590 植中氏2080)
13	次 期 繰 越	2,664	
計		461,622	

編集後記

長年の夢である五〇m、温水プールに程速くはありますがとにかく浄水装置設置並びにプール改修の件が諸先輩の御援助によりまとまり四三年度からは清い水の中で泳げることになり我々現役部員一同はますますの躍進を胸に期し、大いに張り切っております。諸先輩も美しきプールに度々足をお運びになりますようお願い致します。

ところで諸先輩の住所の不明なものがありますのでもし御存知ならば御手数ではございませんようが御一報頂けましたら幸いに存じます。

(井上記)



昭和四十三年三月一日 発行

発行所 神戸市灘区六甲台

菱 泳 会

神戸大学水泳部

編集 神戸大学水泳部菱泳編集係

発行者 木 内 資 雄

印刷所 神戸市東灘区住吉町垣内

小野印刷株式会社

電話 (85) 〇六〇一